

# 祖父母の孤独感に対する認知と関連要因：孫世代と祖父母世代の比較

森 川 知 美

(神奈川大学大学院 人間科学研究科 人間科学専攻 臨床心理学研究領域 202070029)

## *Grandparents' Perceptions of Loneliness and Related Factors : A Comparison between the Grandchild and Grandparent Generations*

キーワード：孤独感 高齢者 祖父母 孫 孫—祖父母関係

### 問題・目的

高齢者が多い日本社会の中で、高齢者が精神的に健康に過ごすことは重要であるといえる。本研究では、孫と祖父母自身が捉える孤独感では、影響要因が異なるのではないかと仮説を立て、各世代の孤独感を構成する影響要因を明らかにすることで孤独感を減少させることができるのではないかと考えた。先行研究から、孫—祖父母関係により、祖父母世代と、孫世代は相互的に発達が促進されることを明らかにしている。また、孫世代との交流により祖父母世代の精神的健康を支えることができるのではないかと考え、この研究の意義として捉えた。以上のことから、本研究では、孫世代が抱く高齢者の孤独感に対する認知と、祖父母世代の自身の孤独感に対する認知を比較し、その違いを確認するために、孫世代が認知する祖父母世代の孤独感の関連要因について、孫世代から見た孫—祖父母関係と祖父母イメージに注目して検討することと、祖父母世代が認知する自身の孤独感の関連要因について、祖父母世代から見た孫—祖父母関係とソーシャルサポートに注目して検討した。

### 方法

#### [1]. 調査協力者

関東私立大学学生と、調査者の友人・知人の成人前期者である孫世代 92 名（男性 27 名女性 65 名。平均年齢 20.78 歳。標準偏差 1.82）、祖父母世代 30 名（男性 7 名女性 23 名。平均年齢 78.90 歳。標準偏差 5.59）であった。

#### [2]. 分析に使用した主な尺度

孫世代の質問紙は基本的属性、孫が認知する祖父母世代の孤独感、孫—祖父母関係評価の孫版、高齢者イメージで構成された。祖父母の質問紙は、基本的属性、自分自身が感じる孤独感、孫—祖父母関係評価尺度の祖父母版、ソーシャルサポート尺度で構成された。

### [3]. 手続き

調査者が授業内に調査概要を口頭で説明し、同意を得られた場合にのみ協力を依頼した。回答は Google フォームにより収集した。祖父母世代には孫世代から Google フォームの URL を伝達してもよい回答を求めた。Google フォームでの回答が難しいことが、孫世代により想定される場合には、Google フォームの質問内容と同様の質問紙と、調査内容を記した紙と、同意書と、返信用封筒を同封し、封をした状態で孫世代に渡した。孫世代には封筒に自分の名前、祖父母の名前、祖父母の住所を記入してもらい、郵送を依頼した。本研究は、神奈川大学における、人を対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て実施した（2021—33）。

## 結果

孫世代が認知する孫世代の孤独感得点の平均は 32.9 点であった。祖父母世代が認知する自身の孤独感得点の平均は 31.8 点であった。

孫世代の関連要因では、孫—祖父母関係評価尺度の孫版に対して、因子分析により 3 因子解を採用し、先行研究を参考にそれぞれを「時間的継承性促進機能」、「日常的・情緒的援助機能」、「存在受容機能」と命名した。また、祖父母イメージに対して因子分析により 4 因子解を採用した。先行研究を参考にそれぞれに「活動性」「有能性」「幸福感」「温和性」因子と命名した。祖父母の関連要因には収集データの少なさにより、因子分析を行えなかったため、孫—祖父母関係評価尺度祖父母版は先行研究の 5 因子構造を用いて、ソーシャルサポートについては、合計得点で分析を実施した。

以上の関連要因を用いて孫世代の認知する祖父母の孤独感との関係を回帰分析を行った。結果、孫—祖父母関係では「時間的継承性促進機能」因子から正の標準化係数 ( $\beta = .274$ ) と、「存在受容機能」因子から負の標準化係数 ( $\beta = -.428$ ) が有意であった。祖父母イメージでは「幸福感」因子から、負の標準化係数 ( $\beta = -.368$ ) が有意であった。それ以外の関連要因は有意ではなかった。祖父母の認知する自身の孤独感との関係を回帰分析を行った結果では、祖父母の孤独感に与える影響はどの関連要因からも有意差は得られなかった。

次に各世代に対して基本的属性を独立変数に設定し、関連要因を従属変数にノンパラメトリック分析を行った。結果、孫世代では孫—祖父母関係の「存在受容機能」因子は、居住距離の同居群のほうが別居群よりも高い値を示し、孫—祖父母関係の「時間的継承性促進機能」と「日常的・情緒的援助機能」は、交流頻度が半年に一回以下の群のほうが半年に一回以上の群よりも高い値を示した。交流方法による有意差は得られなかった。祖父母世代では、全ての基本的属性において有意差は得られなかった。

## 考察

### [1]. 世代ごとの孤独感の認知

世代による孤独感得点に有意差が見られなかったため、孫世代と祖父母世代の捉える量的

な孤独感には差異がなかったといえる。

## [2]. 基本的属性の関連

本研究の結果からは、居住距離と交流頻度と交流方法が孤独感に対する影響要因であると認められなかった。孤独感の認知は、物理的な交流とは関係のない部分で行われている可能性が示唆された。特に交流方法からの孤独感への影響は認められないことは、電話やビデオを使用した交流により、孤独感の増加防止に努めることができる可能性を示唆しているのではないだろうか。

## [3]. 孫世代の孤独感の関連要因

孫世代が認知する祖父母の孤独感と孫—祖父母関係については、「時間的継承性促進機能」が高いほど、「存在受容機能」が低いほど孤独感を高く認知することが明らかとなった。「時間的継承性促進機能」から孫が自分の世代性を考慮する際に、祖父母の未来のことを思い、老いを意識することが孤独感と関連したのではないかと考察する。「存在受容機能」から祖父母との親密な関係性が孫の認知する祖父母の孤独感に関連すると考えられる。

孫世代が認知する祖父母の孤独感と祖父母イメージでは、祖父母のことを活動的で、充実しており、温和であり、充実していると感じていることが明らかになった。孫の認知する祖父母の孤独感の関連要因として、「幸福性」が低いほど孤独感を高く認知することが明らかとなった。孫世代は祖父母が人生に満足していると感じるほど孤独感を低く認知していた。

孫世代の基本的属性と孫—祖父母関係では「存在受容機能」において別居群よりも同居群のほうが得点が高かった。同居している祖父母のことを孤独感が低いと認知している可能性がある。同居群のほうが祖父母に存在を受容される機会が多いことが予想でき、このような結果になったのではないかと考察する。また「時間的継承性促進機能」と「日常的・情緒的援助機能」において交流頻度が半年以上の群よりも、半年以下の群のほうが得点が高かった。「日常的・情緒的援助機能」と孤独感の関連は見出されなかった。交流頻度が少ないことで、交流するたびに祖父母の時間の経過や、老いを前回の交流よりも大きく意識することや、「日常的・情緒的」援助を受ける機会が少なくなるため、このような結果になったのではないかと考察する。

## [4]. 祖父母世代の孤独感の関連要因

祖父母が認知する自身の孤独感と各関連要因、基本的属性の間では有意差は見られなかった。本研究では各尺度の得点に対し調査データの不足や、欠損値の多さから、因子分析を行うことができなかつたため、孤独感の関連要因について十分に検討することはできなかつた。また、質問項目の中で、祖父母に配偶者などの同居成員がいるのかどうかを明らかにしていなかつた。祖父母の孤独感を調査することにおいて、世帯成員の存在の把握は必要不可欠だろう。

## [5]. 結論

本研究で目指した、孫世代が認知する祖父母の孤独感と、祖父母世代が認知する自身の孤独感では、孤独感に対する影響要因のとらえかたが異なるのではないかという仮説を検証することはできなかった。しかし、孫世代が認知する祖父母の孤独感に対する影響要因の基本的属性による違いの一部を確認することができた。今後は、本研究の結果を踏まえ、基本的属性のデータ収集からより具体的な項目を設定して、調査を行いたい。また、孫世代の祖父母に調査を依頼していたため家族関係による孤独感を抱えている祖父母世代のデータは今回の調査では収集できていないことが予想される。今後の研究については、孫世代との交流の少ない対象者の協力を得る必要があるだろう。

## 【参考文献】

都合により割愛させていただく。